



第一部 夏

（昭和五十年（一九七五年））

1. トン子、ころがる

富山勢子





1. トン子、ころがる

キイ——ツ！

と、のうてん脳天を突き抜ける、すさ凄まじい金切り声かなきりこえが、ちんじゆ鎮守の森に響き渡った。

その金切り声かなきりこえが引き金かぎとなって、五人の子どもがバタバタと、ターザン墓場はかばに飛びおちる。

つんのめつたりころんだり、しりもち尻餅をついたりしながらも、さっと起きあがるや、足元に張りめぐらす木の根やつるつるの赤土あかどに足をとられながら、石段沿いを駆けおりにいく。
キイキイト、あの金切り声かなきりこえがあとを追いかける。

するみは、あしど足留めを食らっていた。

ターザン墓場は、なだらかにつづく石段の



途中、直角に折れまがった石段の角下かどしたにある、土俵どひょうくらしい窪地くぼちである。そのど真ん中に、トン子とんこが蛙かえるのようにちよこんと座っていたが、凄まじい金切り声かなきりこえが「はっけよい」の掛け声かけこゑとなったようで、そこへちよこんと飛びおちた。するみは、飛びかかられた格好かっこうとなったのだ。いくら相手あいてがチビのトン子とんことはいえ、いきなり飛びかかられては、勝てるわけがない。

するみは地面じめんに叩きつけられた。が、素早くするみは、胸の上にのしかかるトン子とんこを脇わきに押しおしのけながら起きあがる。

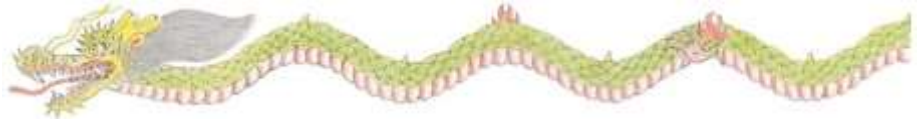
起きあがるや、あわてて手を差し伸べた。トン子とんこはまぬけなカナブンのように仰向けあおむけになつて、手足てあしをバタバタさせ、起きあがれないでいる。するみがトン子とんこの両腕りょううでをつかんで起こしてやると、抱きついてきた。

抱きつかれたままするみは、トン子とんこをひき

るようにして、すぐそばの赤土の段々をのぼり、石段にあがったところでつまずいた。どさつ、とトン子を下敷きどころだするみは、しかし、すぐさま起きあがるや、トン子を抱き起こし、その手を握りしめ、ぐいっと引っぱって石段を駆けおりた。

トン子も必死についていく。足がもつれ、いまにもころびそうで、それでもどうにかこうにか持ちこたえているのも、するみが手を引いてくれていてのおかけだった。

が、とつくに限界を越えている。ぐいぐい手を引っぱり、猛烈な勢いで石段を駆けおりするするみに、これ以上、ついていけそうになり。トン子にしたって、その気になれば、するみの手を振りほどくことだってできたのに、そうしなかったのは、するみの支えがなければ、すぐころぶのが目に見えていたし、それに手を放したら最後、ひとりそこに置き去り



にされ、あつという間にするみが逃げてしまいいそうな気がして、生きた心地がしなかった。どうして思いつかなかったのか、不思議だ、スピードを落としてもらえばすむことである。そうすれば、いくらか楽になれる。

そう思うがトン子は実行した。

「まって」

ところが、トン子のちよぼ口から放たれた声は、言いたかった言葉にはならず、自分のものともこの世のものとも思えない、不気味な呻うめき声だった。

「ううっ……」

トン子自身ぞつとして、ころびそうになる。本人でさえそうなのだから、さぞやすするみはぞつとしたことだろう、拍車はくしゃが掛かった。トン子の腕をもぎとる勢いで、一心不乱いっしんふらんに、石段を駆けおりるものだから、ますますトン子はころびそうになる。泣き虫のトン子は、

泣く暇もなく、死に物狂いになって、石段を駆けおりなければならなかった。

そうこうするうちに、石の鳥居がすぐそこまで迫^{せま}ってきた。鳥居を抜ければ石段もあと六段でおわる。するみのスピードはぐんと落ち、トン子と横にならんだ。

トン子はというと、ほっとした拍子に足がもつれ、ちょうど鳥居を抜けるか抜けないかのところで、つんのめる。

気が緩^{ゆる}んでいたするみの手から、するっとトン子の手が抜けた。あわててするみが手を伸ばしたが間に合わず、とうとう恐^{おそ}れていたこと、トン子はころんだのであった。

一足先に、鳥居を抜けていた仲間たちは、石段の下でくつろいでいた。森の影になってひんやりと気持ちのいい、コンクリート舗装^{ほそう}の参道に、足を投げだして座ったり寝そべったりして、乱れた呼吸を整^{ととの}え、ほてった体を



冷^さましていた。

そこへ、石段をおりてくる足音がして、おのおのそちらのほうへ視線を起こし、そうしてトン子がころぶ瞬間を目撃した。

だからといって、あつという間のことで、助ける術^{すべ}もなく、できたことといえば、あ、と口をあけて見ていただけだった。

顔から落ちる。

ごろごろと石段をころがる。

キィ——ン！

耳をつんざくような騒音。

なんのことはない、拡声器^{かくせいき}のしわざだ。

「キィーツ！」

と、ミンが金切り声をあげて共鳴^{きやうめい}した。

拡声器のハウリングと、ミンの金切り声がおさまるや、愛想^{あいせ}のない、いつものがなり声が、拡声器を通して、輪を掛けて耳障^{みみざわ}りに、あたりにやかましく響き渡る。

すいかす

すいかす

ながうらすいかす

聞きなれた、西瓜売りの呼び声が、日常に引き戻してくれた。子どもたちは急いでトン子のまわりを集まる。そして、再び非日常を目の当たりにして、動揺した。

「ち……」

と、雀の鳴いたような声を発したのは、するみだった。仰向けにぐったり倒れたトン子の顔から、赤い血が流れている。

そのトン子の頭のほうにはムツが、足元にはカイが、四つん這いになって、倒れている妹の体をはさんで、瓜二つの顔を見合わせ、そろってその口は、ぼかんとあいていた。

ごつん、と大きなくりくり坊主と、小さなくりくり坊主がぶつかった。ごうけん兄弟だ。血を見てごう太が縮みあがっているところに、



弟のけん太もまた、血を見て恐ろしさのあまり兄に抱きついて、頭をぶつけたのだ。

ごう太は、いきなり抱きつかれて驚いたのと、暑苦しかったのと、それと、血なんてたいたことないと虚勢を張って、こんどはみずから、ごつん、と頭突きを食らわした。

「アカ」

ミンが首をかしげてそう言った。ぞつとしてトン子は目をあける。

生ぬるい息が、ふつと顔にかかったのだ。するみだった。するみの顔が迫ってくる。その強張ったするみの表情から、すぐにトン子は自分の身に、よくないことが起きているらしいことを感じとり、大声をあげて泣きたくなくなった。

ところが、どうしたことか、声が出ない。起きあがるうとしても力が入らず、指一本動かせない。

胸がドクンドクン高鳴る。

胸の中に変な生き物がいて、その生き物がいまにも胸の皮を突き破って、飛びだしてくるのではないかと怖くなって、ますます胸が高鳴った。

いきなり両腕を引っぱられ、上半身を前に持つていかれる。右にムツが、いやカイか、左にカイが、いやムツか、この双生児そうせいじに腕を引っぱられ、トン子はむりやり立たされた。

足に力が入らず、ふらつとなる。がっちり双生児が両脇を支えた。

ふと、トン子は、胸元を見おろした。

洗濯した日以外はいつも着ている、お気に入りの薄桃色のサンドレス、そのシャリーングの飾りのついた胸元に、赤い玉がぼちぼちと滲にじんでいる。

額ひたいから汗が流れ、頬ほおを伝って、顎あごの下から滴したたり落ちる感触がしていたが、まさかそれが



血とは思いもしなかった。

いま知った。

この薄桃色のサンドレスの胸元に、ぼちぼちと滲んだ赤い玉は、血、以外の何物でもない。血が出ているということは、怪我けがをしているということだが、トン子にとっては傷の痛みよりも、血に対しての恐怖のほうが先に立った。

その恐怖から逃げようと、両脇を支えている双生児の手を振りほどき、ふらふらと、とりつかれたように歩きます。

あわてて双生児がトン子の腕をつかまえ、引き返そうとして、瓜二つの顔を、ぱつ、と見合わせた。

目の前は横断歩道。後ろに戻るよりは前へ進んだほうがマシ、と以心伝心いしんでんしんで意見が一致したようで、トン子を連れて渡りはじめる。ならんでするみが渡り、ごう太とけん太も

黙ってあとにつづいた。

「アカ、アカ、アカ、アカ、アカ、アカ」

ぶつぶつ言いながらミンもついてくる。

「よう太が突然、だらしなく伸び切って汚れた、水色のランニングシャツを脱ぎながら、

トン子の前に飛びだしたかと思うと、脱いだそのシャツで、トン子の頭をすっぽり覆った。

それで止血をしたつもりか、それとも血まみれのトン子の顔を隠したのか、わからないが、よう太は、たたたと横断歩道を渡りきると、そこに突っ立って、みんなが渡りきるのを、ただじっと見守った。

ぷっ、ぷうっ！

渡るのか、渡らないのか、横断歩道でもたもたしている子どもたちに、クラクションを鳴らして急ぎ立てたのは、黄色いダンプカー。そのダンプカーに向かって、けん太が「アツカンペー」をしたが、その仕草に、いつもの



元気は見られなかった。

ぷっ、ぷうーっ！

しつこくクラクションが鳴り響く。

黄色いダンプカーの運転手がいらいらするのも、もつともなこと。

早く家に帰りたいために、トン子は急いでいたが、さほど前に進んでいなかった。打ったか捻ったかどうかして、トン子の足は思うように動かなかった。懸命に小さな足を一歩、前へ前へと踏みだしてはいるものの、地面に足の裏がついている感覚がない。この足が、本当に自分の足なのか自信がない。が、トン子の足はたいして影響ない。

げんきょう

元凶はムツとカイである。トン子の両脇に陣取るこの双生児が、横断歩道を足踏みするように歩いていたため、黄色いダンプカーやほかの車の運転手たちを、いらだたせることになったのだ。

双生児は、石段からころげ落ちた妹の顔を見た瞬間、ただちに家に連れて帰らなければならぬ、と判断した。

（はよ帰らんば……）（おかあさんと共に連れて行かんば……）と至らないながらも健気に、一端の兄としての責任を果たそうとしていた一方で、こういうことになったのも自分たちの責任かもしれない（どがんすうか……）（どがん言い訳ばすう……）と、うしろめたい気持ちを引きずっていたため、足取りに迷いが生じていたのだ。

ふだんは、白と黒のしまの存在なんか無視して、団地の入口めがけて、最短距離で道路を突っ切るといふのに、この時ばかりは交通ルールを守って、横断歩道をのろのろと渡っていた。

のろのろをもてあまして、けん太が白線でケンケンパをして遊びはじめる。



ふ——つ！
凄まじいクラクションが、けん太を飛びあがらせた。待ちくたびれた黄色いダンプカーが犯人だ。けん太が脇によけるや、発車した。怒っているように、ガタガタ、ドンドン、猛スピードで坂道をくだっていく。

全員があわてて横断歩道を渡りきったところで、ギギギ、と音が。のぼり車線で待っていたバスのエンジンが不意に止まり、大きな車体が音もなくスーッとさがった。その後ろの白いバンが、あわててバックする。

バスは再びブルンと身震いして、やかましいエンジン音をあげ、さらにまた後ろにさがってから、大儀そうに発車した。

重たい車体は黒煙を吐き吐き、文句を言っているようにブーブー坂道をのぼっていく。そのあとから白いバンが、煙たそうにのろのろとのぼっていった。

それを見送ってから、子どもたちは、のろのろと坂道をくだり、右手につづく高い石垣が途切れたところで足を止め、いつせいにうなだれた。

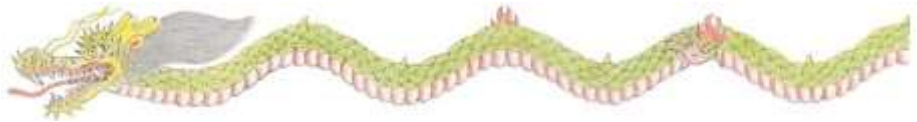
団地の中に、見覚えのある青いトラックが止まっている。そのトラックに、わいわい子どもたちが群がり、声高らかにおしゃべりしている女たちの姿もあった。

「カブトムシば持ってきたぞ〜！」

西瓜売りが逸早く、団地の入口に取り残された子どもたちの姿を見つけ、手を振りまわしている。

ぱっと昆虫少年らは面をあげ、笑顔を見せたものの、すぐにしよぼーんとうなだれた。

トラックの荷台には、色褪せた緑色の幌があり、昆虫少年が飛んで喜びそうなカブトムシやクワガタも、うれしいことに、その西瓜



に負けないくらい、ケースの中で、おしくらまんじゅうしているはずである。

というのも、西瓜を一玉買うと、もし望むのなら（望まない子どもは、まづいないが）昆虫が一匹おまけでついてくるからだ。

人間には、大人と子ども、男と女、デブとチビ、いろいろいる。人間と同様、同じカブトムシ、同じクワガタでも千差万別、幼虫と成虫、雄と雌、体が大きいのがいれば、小さいのも当然いる。サイズが大きければ大きいほど昆虫少年に人気があり、やはりどうしても見た目のかつこよさから雌よりも雄のほうに人気が集まる。だからコカブトムシは人気がいまいちだし、幼虫にいたっては、根気のない子どもは見向きもしない。

一番人気はオオクワガタだ。太神宮の森や、裏山にいるオオクワガタよりもかくて力も強い。どこで見つけてくるのか穴場は絶対に

教えてくれないことから、卵の時から蝮酒まじざけとスッポンの血で育てているという噂うわさもある。そんな西瓜売りが来た日にや、トラックのまわりは、よりでかく、より強いおまけを見よう、できれば手に入れようとする子どもたちで押し合いへ押し合いとなり、一悶着ひとしもんちやくがあるのだった。

とはいっても、購入する西瓜が大きければ大きいほど、おまけもグレードアップする、ちやっかり商売上手なくみになっているので、たとえどんなに子どもがオオクワガタを欲しいほいと駄々だだをこねてみたところで、その分、西瓜の値段も張るわけだから、どうこういっても結局は、その日の母親の機嫌きげんと、懐具合かむじあひに命運めいふんが掛かっているのだった。子どもも、カブトムシも、甘い汁を吸えるか吸えないかは、母親次第しだい、というわけである。

その母親次第で、りっぱなおまけを鼻高々



に見せびらかす者、小さなおまけに甘んあまじる者、ぶうぶう文句を言う者、自分でつかまえるけんよかつ！ と負け惜おしみを言う者、さまざまで、友だちのお慈悲じひでおまけを触さわらせてもらえたり、たまに西瓜のおすそわけもあつたりする。

と、いうわけで、いつもなら、西瓜売りのがなり声を耳にしようものなら、遠くにいようと何をしていようと、うっちゃいて、馳はせ参さんずるというのに、この時ばかりはさすがにそういう気持ちにはなれなかったようだ。

昆虫少年らは団地の入口に突っ立っていた。西瓜売りはおやつと思い、運転席から四角い小型マイクを引っぱりだす。

「オオクワガタば持つてきたぞく！」
がなり声を聞くや、ごう太が駆けだした。オオクワガタの誘惑に負けたのか、真意しんいはわからないが、そのあとにつづいたするみは、

オオクワガタにまったく興味はなかった。ミ
ンもキイキイ言いながらついていく。双生児
はその場を動かず、トン子の両脇をがっちり
支える。けん太は地べたに座り、溝蓋みなぶたの穴に
つまった土を、指でほじくって遊びはじめた。
立ち話をする女たちの中に、ごう太が飛び
込んで行き、何やら叫ぶと、いっせいに、女
たちがこちらを振り返る。

と、その中の一人が飛びだし、血相変えて
駆けてくる。追って、トラックに群がって
いた子どもたちがあわあやってくる。

その迫ってくる先頭の女の顔を見るなり、
双生児は奪い合うように、トン子の頭をすっ
ぽり覆おおった、ごう太の水色のランニングシャ
ツを、剥はぎとった。

春子は愕然がくぜんとした。かわいい娘の顔は血ま
みれで、おぼけ屋敷やしきにいる、おどろおどろし
いバケモンに変わり果はてていたものだから、



言葉も出ず、へなへなとその場にくずおれた。
つられてトン子もへたり込む。

女たちがぞろぞろと駆けつけた。

ミミは薄情だった。いつもかわいがっても
らっている恩を忘れ、ミミのおねえちゃんの
腕から落ちそうになるほど、夏仕様なつしようの虎刈りとらが
の小さな体を乗りだし、顔見知りのシエパー
ド犬にぱったり出くわしたように、トン子に
向かってキャンキャン鳴いている。もしミミ
のおねえちゃんに抱かれていなかったら、ト
ン子に負けず劣おとらず生まれながらに臆病者おくびょうものの
ポメラニアン犬のミミは、血まみれのトン子
の顔を一目見ただけで、しっぽを巻いて逃げ
だしたことだろう。が、いまはミミのおねえ
ちゃんおねえの腕を盾たてにして、噛かみつかんばかりの
勢いきおいでキャンキャン鳴いている。

「見てみんねえ！」

ミミの甲高い鳴き声の上をゆく、威厳いげんのあ

るようなないようなキンキン声が飛んできた。
「いっちゃよん言うこと聞かあんけん、ばちかぶったったあい！」

おくれげせにきなおばちゃんが現れると、さーっと人垣が左右に別れ、道ができた。その道を、どん腹かかえたきなおばちゃんが、つつかけ響かせ、がに股でやつてくる。

きなおばちゃんの恐ろしい剣幕に、火のついたようにトン子が泣きだした。たちまち飛び火して、ほかの子も爆竹さながらけたたましく泣きだす。つられて赤ちゃんのツヨシくんが泣きだし、おまけに犬のミミまで狂ったように鳴き立てるものだから、騒然となる。

春子はこの騒ぎに動転し、手にした回覧板から、子ども会のおしらせの紙を引き裂いて、それで、目の前にへたり込んで泣いている娘の顔を拭おうとし、どん、と、きなおばちゃんの横つ尻でなぎ倒された。



「あらよねえ、こらよねえ」と、口癖の掛け声を発しながら、小太りのきなおばちゃんは大儀そうに、トン子の前に膝を折って座った。春子は女たちに支えられ、励まされながら、きなおばちゃんのさばけた動きを見守った。

いつもきなおばちゃんは短い首にタオルをかけている。近所の酒屋、米屋、タクシー会社、ガソリンスタンドなど日によってロゴは違うが、ごわごわで、あちこち糸のほつれた雑巾にする一步手前、いや、とつくに雑巾にするべきポロタオルである。

きなおばちゃんは首にかけたそのポロタオルの右端をくしゃつとつかむと、まずは汗まみれの自分の顔をぐると拭ってから、血まみれのトン子の顔をぐると拭った。

額に小さな穴が穿け、ぱっくり顎が割れていた。

「あらよねえ」と咎めるように言ってから、

きなおばちゃんは、右端をつかんだボロタオルを、ぼっそり風切るように首から外した。かたわらの春子の横つ面を叩いて悲鳴をあげたのもかまわず、そのボロタオルで首を吊るようにトン子の顎を持ちあげ、頭のとっぺんできゅつと結んで、顎の傷口を止血した。

そばで見ていたカイが、ひつくひつく泣きながら、こんな非常事態においても好奇心を發揮し、きなおばちゃんを真似、手に持ったごう太の水色のランニングシャツで、片割れのムツの首を吊っていた。

パシツと尻を叩かれる。

きなおばちゃんは、カイの手からシャツをひったくると、そのシャツを鉢巻きの要領でトン子の頭にきつく巻いて、後ろできゅつと結び、額の傷口を止血した。

西瓜売りが駆け足でやってくる。トン子を一目見るなり、黙ってさっと、トン子の目の



前に、背を向けてひざまずいた。

トン子は女たちに促され、腕を引っぱられ、西瓜売りの大きな背中へのせられると、きなおばちゃんを先頭に、一行は、病院めざして出発した。

わんわん泣きわめく子どもや、しかめっ面の女たちが、野辺送りさながら、ぞろぞろと坂道をくだってくるものだから、道行く人は何事かと足を止め、振り返って見たり、わざわざ道路を横切ってくる者もいたり。そして、集団を率いるきなおばちゃんのそばにきて、「どがんとですか？」と知りたがった。

きなおばちゃんはやぐらしがって、

「どがんもこがんもなかですよ」とかわし、それにおつかぶせるようにごう太が、

「どがんもこがんもしとらん！」

と、泣きながら突っぱった。

ごう太は、一番年長の小学二年生というこ

とで、トン子の怪我に、双生児以上に責任を感じていた。だから、ただでさえ気が咎めて小さくなっているこの時に、顔なじみの尋問や、見ず知らずの野次馬の好奇な視線が、心の傷をより突つつき、責められているように感じて、精いっぱい強がっていたのだ。

病院までの短い道のりのなかで、ごう太のみならず、子ども全員が「どがんもこがんもしとらん！」とむきになって合唱したほど、そして、きなおばちゃんが「公会堂は貸し切って説明会ばせんばばい」と冗談を飛ばしたほど、物見高い人々につかまり、病院についたころには、みな、きなおばちゃんでさえ、うんざりしていた。

午後休診の札がぶらさがっているが、道路に面した窓の一つはしめ忘れか、あけ放してあり、玄関の扉の鍵はかかっていたいなかった。きなおばちゃんは勝手に扉をあけ、ずかずか



と中に入って行き、キンキン声で呼び立てる。「ごめーんくーださーい！」

待合室は薄暗く、がらんとしていた。

きなおばちゃんのあとからぞろぞろと中に入る。つん、と消毒薬のにおいが鼻をつき、トン子の泣き声はいっそう高くなった。

きなおばちゃんのキンキン声と、トン子の泣き声を聞きつけ、待合室横の階段から、白髪まじりのぼさぼさ頭の先生がおりてきた。寝ぼけ顔の先生は、頭に布を巻きつけた異様な子どもを見るなり、ハッと目を覚ましたように、きなおばちゃんの説明もそこそこに、診察室へと案内する。

西瓜売りに背負われたトン子の泣き声は、母親の春子とともに、診察室の中へと消えていった。

窓をあけ、電気と扇風機をつけるよう、きなおばちゃんはするみに命じ、

「あらよねえ、こらよねえ」と長椅子ながいすに腰をおろすや、早速小言さつこごとを開始した。

「太神宮だいじんぐうに行ったらつまらなくて、あがしこ言い聞かせたとに、もうこいやもん。ほんなこて、こいどんみや、きやあまぐるつばい」

上半身裸、半ズボン一枚のろう太が、悪びわるれることなく、鼻クソをほじりほじり、きなおぼちゃんの鼻先をぺたぺた横切ろうとして、パシッと尻を叩かれた。

「もう二度と太神宮に行ったらつまらあん。ほかんとこで遊ばんば。わかったねえ！」

ついさつきまでしおらしく泣いていたろう太だったが、いまではもうすっかり泣きやんで、片方の手は、きなおぼちゃんに叩かれた尻をさすり、もう片方の小指は、鼻クソをほじりほじり、ぶつぶつと文句を言った。

さすがきなおぼちゃんの地獄耳は聞き取ったが、わざと聞こえないふりをする。



「はあ？　なんてねえ。言いたかこのあつとなら、もつとふつとか声で言わんば。キンタマのついとつとなら！」

ろう太はにやつと笑い、尻をさすっていた手を前にまわし、男の象徴をポンポン叩いて主張しながら、男らしく声を張りあげる。

「そがあんこと言うたつちやあ、遊ぶとこのなかとやもんば！」

「なんのさ」どこに目がついているのかと、きなおぼちゃんは、あきれたように人さし指ひとさしゆびをつきだして「あすけつ！　そけつ！　こけつ！」と歯切れよくあちこち指さし「いっばいあるやろもん」うんざり顔をしかめる。

ろう太もきなおぼちゃんを真似て、鼻クソをほじくっていた小指で、しなやかにあちらこちらと指さしながら「あすけえ！　そけえ！　こけえ！　どけえ！？」と茶化ちやかす。

「どけえ！　どけえ！　山やら……川やらさ……」

つまらんつまらんで言われたら、遊ぶとこつ
てどこもなかないねえ……」

きなおぼちゃんもは肩を揉みながら、まわら
ない首をどうにかまわして、後ろを見た。

するみは大きな目をくりくりさせ、口をと
んがらして抗議している。そのするみの向こ
うに愛娘まなむすめのミンの姿が。ミンは、天井の一角
で首をふる扇風機せんふうきに夢中になって、風のくる
方向に行ったり来たりして遊んでいた。

(せいもそうさねえ……)

するみの言い分ももつとものだ。はあ、と、
ため息をついたきなおぼちゃんだった。

「ふわあん……」

と、大あくびをしたのは、けん太。窓際の
ふかふかのソファひとを独り占め、べったり寝
そべっている。決まってこういう時は、兄の
ごう太に横取りされる運命にあるので、この
ソファひとを発見した時点で、どきどきしなが



ら、ずっと警戒していた。あくびは兄を油断
させておいて裏をかく、けん太の作戦である。
やっぱりだ、ごう太が急に身構え、そうつ
と忍び寄ってくる。薄目をあけて警戒してい
たけん太は、危険を察知したが、気づかない
ふりをしておいて、手の届く範囲にごう太が
近づいた時に、さっと起きかける。

が、それより早くごう太が手で制し、けん
太の寝そべるソファひとに飛びのるや、あけ放
たれた窓の外へ、ペツ、と唾つばを吐き散らした。

「わあーっ！」

外かんせいから喚声かんせいがあがった。

「キャンキャン！」

ミミの鳴き声もまじる。

ごう太が窓から身を乗りだし、

「のぼすんなよ、バカが！」

と、言葉は乱暴だが笑顔で言う、

「バカでけっごう晩飯ばんめし食うな！」

と、捨て台詞を残して笑顔で退却していく、顔なじみのワルクロボンズらの姿が。さつきからずっとこいつらは、窓の外からこっそり中のようすをうかがい、窓際のソファーに、無防備に寝そべっているけん太がちょうどいい、目をつけ、いたずらしかけたところ、運悪くごう太に見つかつたのだ。

ムツは、だらしなく壁にもたれて床に座り、爪を噛んでいたが、ミミの「キャンキャン」とうるさい鳴き声に反応して、弾かれたように背筋を伸ばすや、素早く右手を半ズボンの右ポケットに突っ込んだ。

思わずにやっとしたところ、きなおばちゃんと目が合った。ムツはばつが悪そうに目をそらし、右ポケットに手を突っ込んだまま、きなおばちゃんから隠れるように体の向きを変える。そして、こそこそと、ポケットから取り出したのは、赤いセロハンの小さな包み。



ミミのおねえちゃんは、イベントがある毎に、クッキーやマドレーヌやプリンなど、お菓子をつくって、子どもたちに振る舞い、子どもたちの喜ぶ顔を楽しみにしている。子どもたちもメインイベント同様、今日はどうなお菓子か、心待ちにしているのだった。

先週の日曜日、わが日棟の住人誘い合わせで、雪浦へ海水浴に行った。出掛けにミミのおねえちゃん、子ども全員にもれなく、赤、青、黄、緑、透明のセロハンに包んだ手製のキャラメルを、五色ずつ配った。ムツを含めたほとんども、もろうなり口の中に放り込み、行き車の中でくちやくちや食べ尽くしてしまつたなか、トンは透明のセロハンのキャラメルだけをけちけち食べた。もちろん中身はみんな同じ味で、みんなおいしいのだが、五色の中で一番ふつうの味がしそうな透明のセロハンのキャラメルだけを食べて、あとの

四色は、一日一つずつ食べるつもりで、だいたいにとっておいた。一番好きな色の赤いセロハンのキャラメルは、お盆に食べるつもりだった。

雪浦の大波に溺れ疲れて、帰りの車の中でぐったりだったトン子だが、家に着くなり、半分眠りながらも忘れずに、水屋の一番下のひきだしに、残しておいた四つのキャラメルをこっそり仕舞った。そのひきだしはトン子の宝物入れて、真珠やおはじきやビー玉、ピンドめや色つき輪ゴムなど、だいたいなものを仕舞ってある、母親の春子以外は誰も知らない、トン子だけの秘密の隠し場所だった。

はずだが、双生児のムツとカイは知っていた。知ってはいたものの、双生児にとっては、どうでもいいガラクタばかりなので、興味がなかった。

今朝、双生児がラジオ体操をおえて帰って



きたところ、母親の春子はバタバタしていた。大工である亭主の鉄男の、ステテコの伸びたゴムを入れ替えていて、さらに、便所に居座る鉄男に負けてたれかぶったトン子の後始末に追われ、双生児の朝ご飯の配膳まで、手がまわらなかった。

カイはさっさと自分でご飯と味噌汁を装いでいたが、ムツはそれがやぐらしくて、手っ取り早く食べられる物はないかと、水屋のひきだしをあげたりしめたりして、物色した。以前、口砂香を見つけたことがある。

で、見つけた。一番下のひきだしに、真珠やらおはじきやらビー玉やらに埋もれた、赤いセロハンの包みのキャラメルを。

新しいパンツに着替えたトン子が、風呂場のほうから出てくる気配がしたので、思わずくすね、半ズボンのポケットに隠したことを、食い意地の張ったムツは不覚にも、うっかり

いまのいままで忘れていた。

ワルクロボンズらの声にまじった「キャンキャン！」というミミの鳴き声で、思いだした。ミミは、キャラメルをくれたミミのおねえちゃん、我が子同然の犬だからだ。

どうやらミミのおねえちゃんは、怪我したトン子を心配して、ミミといっしょに病院の外で待っていてくれるらしい。

義理堅^{がた}いミミのおねえちゃんにムツは感心しながら、きゅつと両端をねじってある赤いセロハンの、その両端を引っぱって、くるつとひらくつもりだったが、この暑さでとけたらしく、剥^はがれない。赤いセロハンにべったりくっついたキャラメルを、夢中になって、前歯でこそぎ取る。

そのムツの隣には、カイが突っ立って、壁のポスターにじっと見入っていた。

と、そのカイが勢いよく体の向きを変え、



その拍子^{ひょうし}にドンと膝^{ひざ}が、ムツの背中を直撃したものだから、ムツはせっかく前歯でこそぎ取って、口の中で一つに丸めたキャラメルを、ごくんと飲み込んでしまった。

がっばいした。頭にくっ！

キャラメルの仇^{かたき}を討^うたんと、ムツが勢いよく立ちあがったところ、ぐいと喉^{のど}を指で突かれて返^{かえ}り討^うちにあい、息がとまりかける。

ムツは乱暴にカイの手を払い、

「なんぼすつ……」

パッチン、とホッチキスで綴^とじられたように唇^{くちびる}をつままれ、ムツは先を言えず、

「クチ！」

言ったのはカイ。

そのカイの一言に、ムツは抵抗をやめた。

まだ怒りはおさまらないが、カイが何をおもはじめる気か、カイのことだ、たぶん、おもしろいことがはじまるのだろう、おわるまで

仇討ちはおあずけ。

カイはにやにやと、人さし指でムツの唇を突つつき、あらためて「クチ」と言ってから、つつーと顎、喉、胸の真ん中をなぞりながら、

「シヨクドー」

「イ」

「シヨーチョー」

「ダイチョー」と、説明していく。

そしてカイの人さし指が、ムツの股ぐらをなぞりながら、カイも体ごとムツの股ぐらをくぐって、ムツの背後にまわる。

ムツはこしよばゆくて油断していた。

「ミトコウモン！」

カイは叫ぶと同時にカンチョーしたあと、すぐさま壁を、コンコン、と叩いて、ムツの怒りの矛先をはぐらかす。

まんまと氣勢をそがれ、ぶっ！ と吹きだしたムツだった。



壁にポスターが三枚ならんでいる。

ひょうきんなガイコツの絵。

おどろおどろしいムキムキマンの絵。

何よりムツの興味を引いたのは、ヌードの絵だった。

それがそんじよそこらのヌードじゃない。

ムツと同じ年格好のその男の子は、体の中がスケスケの丸見えで、透明人間のなりそこねといったところか。ピンク色の魚肉ソーセージや、赤身のかたまり肉、こんなものももし市場にあったら、もしお金があったら、ぜひひとり占めして食べてみたい、蛇のように長いくねくねソーセージや、太くて長いぷりぷりボンレスハムがぎっしり体の中に詰まっていた、見た感じ、迷路のよう。

斬新なヌードにムツはいたく感動し、見とれていた。

カイは、そんな片割れにしめしめと喜び、

「カンチョ、カンチョ」とおもしろがって、股のあいだから迷路をスタートする。

くねくねまがりくねった道を指でなぞって上へ上へのぼっていくと、迷子になることなく、かんたんに、口からゴールできた。

この意外な結果に、カイは思わず、ぷつ、とジゴ鉄砲でっぼうを撃うって興奮した。

一見、肉がぎっしり詰まっているだけのように見えて、実は、肛門から口までは、一本道でつながっていたのだ。

この思わぬ発見に、ムツも興味をそそられた。早速、カイとは逆に、口のほうから指でなぞってくねくね道をおりていき、出口の肛門を、といつても、その絵の顔は横向き、体は正面から見た姿を描いてあるので、肛門そのものは見えないが、指がヌードの股ぐらを突破すると同時に、ムツはにやにや笑って、「コウモンさまあ」と言うなり「ははあ」と



床にひれ伏した。

ソファーに肘枕ひじまくらしてにやにや眺めていたけん太が、にやにや立ちあがり、にやにややってくる。が、やっぱり兄に横取りされた。けん太はぶうぶう文句を言ったが、ごう太はかまわず、スケスケ迷路ゲームをやりはじめる。

ところで、このポスターは、暇つぶしにもってこいの迷路ゲームではない。食べた物はいったいどこへ行くのか、小さな子どもにもわかりやすく、かんたんに説明したもの。絵心のある看護婦さんの手によるものか、ほかの二枚のポスターも、それぞれ骨と筋肉のつくりが描かれている。

スケスケの体をした男の子は、右手に箸はしを握り、左手に大きなどんぶりを持っている。どんぶりの中身は、ポスターの説明によると、長崎名物、ちゃんぽんらしいが、よんにゅ、具だくさん、どんぶりにおさまりきれず、ま

わりに飛び散っている。男の子は、あーんと大口をあげ、ちゃんぼんを食べられる喜びで、はちきれんばかりの笑顔。

一方、けん太ははぶてた。ごう太がすぐに飽きてくれたので、自分の番がまわってきたというのに、その前に、カイの授業を、何があっても受けなければ、ステスケ迷路ゲームをさせてもらえない羽目になったからだ。無視して力づくで迷路をやるうとすると、ごう太が力づくでけん太に言うことを聞かせた。

「キーン、コーン、カーン、コーン」ムツがさつさとチャイムを鳴らし「きりーつつ！

きをつけっ！ れいっ！ ちゃくせつき！」と率先して級長を務めてくれたので、カイはスムーズに、先生面して、授業をはじめることができた。

「一時間めはクソの勉強です。よこやまけん太、先生の話をよく聞きなさい。言うこと



聞かん子は、こいよ」

見せしめに絵の男の子をデコピンしてから、「グラバーくんはうれしかとです」

と、勝手に命名。

「今日の給食はちゃんぼんです。おかあさんはいつも言います。にやんにやんよう噛んで食べんばよって。グラバーくんはおりこうさんなので、言うことば聞いて、ちゃんぼんにやんにやんよう噛んで食べました」

カイは、口を動かせないグラバーくんにかわって、自分の口を動かし、にやんにやんよく噛んで味わってから、ごくりと飲み込む。

「≪クチ≫でにやんにやんよう噛んで食べたちゃんぼんは、トンネルを通ります」

口の下に伸びるピンク色の魚肉ソーセージを指でなぞりながら、

「このトンネルが≪シヨクドー≫です。中はまっくらですが、一本道なので、目をつぶっ

も言わんで、おさがりのどろどろみどろば、チューチュー吸います。どろどろみどろは汁ば吸われて、もうどろどろみどろじゃなくなりました。カスばっかいで、どろどろおどろ黄土色おうどいろです」

股またの部分をつんつんつつつきながら、

「そいで、んくつ、ときばります。あんまいきばったら痔じになるので気をつけましょう。んくつ、んくつ、んくつ……ぶりぶりっ！

おお、ワンダフル！《コウモン》から生まれました。そいも二つもです。一卵性双生児のクソです。めでたし、めでたし」

しかし、現実には、ちゃんぽんを食べればすぐ、ぶりぶりっと大便に変身して、肛門から出てくるほど、生やさしいものではない。体の中では胃や、小腸しょうちようや大腸だいちようなどの消化器官が、総力をあげて、一日掛かりで大便を製造しており、その苦勞ははかりしれない。



それでも、口から肛門までの道のりは、まるで洞窟どうくつの中のようにトンネルになっていて、広場があったり、くねくねまがっていたり、入り組くんで遠けれど、一本の道でつながっているということ、カイ先生の授業で、改めてそのしくみがわかって、ムツはいたく感動した。が、感動しているところに、口やかましいカイ先生から、

「ムツはさ、おかあさんの言うことば聞かんで、キヤラメルばにやんにやん噛かまんて丸呑みしたけん、キヤラメルはそっくりそのまんま、ミトのコウモンさまから出でてくつ。そしてまた食べらるつたい。心配せん」と

とふざけ半分で慰められて、ムツは、はたと思いました。

キヤラメルを丸呑みしてしまったのも、そもそもこのカイのせいである。

食べ物の恨うらみは恐ろしい。

「キャラメルキャラメルの仇かたき！」

ムツはカインに強烈なデコピンを食くらわせたが、そのキャラメル自体、妹からくすねたことなど、都合よく忘れていたムツだった。

「キャラメルキャラメルの仇かたきの仇かたき！」 倍返ばいがえしを食らう。

「キャラメルキャラメルの仇かたきの仇かたき！」 倍倍返ばいばいがえしだ。

「キャラメルキャラメルの仇かたきの仇かたきの仇かたき！」

「キャラメルキャラメルの仇かたきの仇かたきの仇かたきの仇かたき！」

仇討かたきうちちは延々えんえんとつづいた。

けん太は、ようやくスケスケ迷路ゲームでできることになり、口からスタートした時こそ、鼻歌まじりに、指でくねくね迷路をたどって楽しんでいたものの、あつという間に、ゴールの肛門が見えてきた。肛門の一步手前で指を止めると、もと来た道をくねくね逆戻り、こんどはゴールとなった口から出るなり、「ゲロ」と飽あき飽あきしたように吐き捨て、それつきりで迷路ゲームはやめてしまった。



飽あき性しょうのけん太は、おもしろいものを求めて、ぺたぺたとさすらう。

「遊ぶとこのなかつてねえ……」

ありあまる元氣げんきをもてあましている子どもたちのことが、不憫ふびんでならない、きなおばちゃんだった。子どもたちを慰めようと、きなおばちゃんなりにまだ考えていたのだ。

「うんにや！」

と、膝ひざを叩いて気合を入れ、

「なんのさ。いっぱいあるやかねえ。運動場やら公園やら、あとほら……」

きなおばちゃんの年とつた頭では、それっぽっちの、パツとしない、ありきたりな場所しか思いつかない。あとの言葉がつづかず、慰さめるつもりが、かえって慰めてもらいたい気持ちになった。

「きなおばちゃん、なんば言いよつとねえ。赤ちゃんじゃなかとやけん、運動場やら公園

やらそがんとこで遊んだっちゃ、おもしろう
あつもんねえあー

事もあろうに、幼稚園児のけん太から指摘
されると、きなおぼちゃんは自分の無力さを
痛感し、手持ちぶさたに、こりかたまつた頭
を、指を立てて揉みほぐした。

そのきなおぼちゃんの目の前を、けん太が
あてつけがましくぺたぺたとさすらいながら、

「ふわあ、ふわあ、ふわあ」とあくびを連発。
そんな弟の両脇に、ごう太が背後からいき
なり手を突っ込んで、くすぐりはじめる。

はじめこそおもしろがっていたけん太も、
乱暴な兄のやり方にだんだん腹が立ち、乱暴
にやり返す。さらに双生児まで参戦し、たち
まち派手な取っ組み合いに発展した。

「じつとしとかんねえ、じつとお！ 言うこ
と聞かん子は、ここんヤブ医者にキンタマば
つん切ってもらおうけんねえ！」



おとなしくなる気配がない。

「あーもねえ！ 言うこと聞かん子は地獄に
落ちちゃうつとやけんねえ！」

きなおぼちゃんがお得意の地獄を持ちだし
ても、じつとしていふことに痺れを切らした
ワルクロボンズたちには、押さえがきかなく
なっていた。

里子さんが長椅子ながいすから立ちあがる。取っ組
み合っているごうけん兄弟のあいだに割って
入り、まずは兄のごう太の尻をパーンと叩き、
つぎに弟のけん太の尻を叩こうとしたところ、
ギイツと診察室の戸がひらいた。

まいったようすで、西瓜すいか売りが出てくる。
泣き虫トン子にほとほと手を焼いたようだ。

けん太が助けを求めて西瓜売りに駆け寄り、
その大きな背中を盾たてにした。白いTシャツは、
トン子の血や涙や鼻水で、じゅっくり濡れて
いた。

「おじちゃん、はよう帰らんば、泥棒から、西瓜ばかつぱらるっばい」

「はよ帰ろうでえ」

「はよう、はよう」

「はよ行かんば、カブトムシから西瓜ば食べられてしまうばい」

ワルクロボズたちは、カブトムシ見たさに、そして、口うるさい女たちから自由になるために、西瓜売りの腕をぐいぐい引っぱり、逃げるように病院から出ていった。

やれやれと里子さんが席に戻りかけたところ、ふと、するみの姿が目にとまった。

行儀よく長椅子ながいすに座って、いつ前の棚から出したのだろう、挿し絵さえのついた読み物を、ぱらぱらと繰くっている。

男の子と女の子では、どうしてこうも違うのか、手に負おえない息子を二人も抱かかえる里子



さんは、はあ、とため息をつきながら腰をおろしたところ、同時に、はあ、とため息をついたのは、隣に腰かけているきなおばちゃんだった。

二人の女はうんざり目顔めがおで慰め合った。

その二人の視線は自然と、後ろに腰かけている、するみに移る。

視線を感じて顔をあげたするみは、疲れきった女の二つの顔に直面すると、観念したように読んでいた本をとじた。

ミンは飽せんきもせず、天井の一角で首をふる扇風機せんふうきと鬼ごっこして遊んでいる。

「はあ……」




するみは演技めいたため息をつくくと、トン子が血を流すに至ったいきさつを、練習でもしていたように、すらすらと語りだした。

「インディアンとアマゾン」へつづく




第一部 夏

- | | |
|---|--|
|  | 1. トン子、ころがる 14 |
|  | 2. インディアンとアマゾン 41 |
|  | 3. やまんば、あらわる 60 |
|  | 4. 龍 ^{じゃ} の腹 ^{はら} 、発見 92 |
|  | 5. 奉納 ^{ほうのう} 131 |
|  | 6. チンブラ妖怪 ^{ようかい} 、あらわる 162 |
|  | 7. 夕飯 174 |
|  | 8. 寄り会 204 |
|  | 9. 西瓜 ^{すいか} 242 |
|  | 10. 子龍 ^{こじゃ} の鼻クソ 262 |
|  | 11. 日棟 ^{ひとう} の住人 286 |
|  | 12. やまんばの怒り ^{いか} 321 |
|  | 13. 花火 343 |
|  | 14. 龍踊り ^{じゃおど} 356 |
|  | 15. ゲゲゲのゲンバク 404 |
|  | 16. 頭の上に…… 433 |






第二部 秋

-  17. くんち 14
-  18. 無鉄砲 35
-  19. 血 62






第三部 冬

-  20. どんぐりのひよこ 78
-  21. お姫さまの悲劇 94
-  22. バケモン 123

第四部 春

-  23. 新顔 162
-  24. 底なし龍じゃの池 182
-  25. 決闘 231
-  26. トン子、逆鱗げきりんにふれる 261
-  27. 消えた龍じゃ 297

第五部 そしてまた夏

-  28. ドッジボール大会312
-  29. 死ぬる330
-  30. 金魚のフン子ちゃん377
-  31. ラジオ体操420
-  32. ^{じゃ}龍、のぼる475

※文中の「龍」は「じゃ」と読みまっしえ。

せいこん
勢魂の

勢魂による

勢魂のための

勢魂文学のごたっと

～私家版～

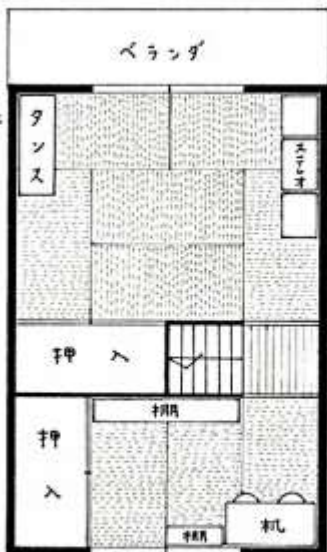
じゃじゃ 上巻 464頁

じゃじゃ 下巻 512頁

一階



二階



田畑家

山川アパート日棟

茂原	渡辺	元村	井手
エユリ	アマモト	カズヤ	リョウコ

吉村	池田	草野	石川
ツヨシ	よっちゃん	ユウジ	するみ

中島	木山	小川	横山
老夫婦	アキラ	カナコ	ごう太

田畑	神田	鈴木	木下
カミツ子	ミン	ミユカ	ヒロポン

金子	松島	芝田	佐藤
コト子	モモコ	ミミ	マキ

エレベーター納屋

納屋



じゃじゃ

第一部 夏

1. トン子、ころがる

2011年 3月9日 初版

2011年 12月8日 改版

〒852-8061

長崎市滑石4丁目12番6号

畠山 勢子